

初校校正刷り、いわゆる初校ゲラが届いた。12月刊行予定の書籍の原稿である。3月まで出し続けていた「校長室だより～燦燦～」が本になる。令和1年11月11日に第1号を出し、令和6年3月28日の第1000号で終了した。現在の「園長通信～こころ～」は、その続編という位置づけである。

1000号分を本にしようとする、国語辞典並みの厚さになってしまう。費用がかさみ、本の値段も高くなる。さて、どうするか。出版社の編集者と相談したところ、1000から100を選ぶことになった。そのため、改めて1000号分の原稿を読み返した。原稿用紙にすると、3000枚以上になる。さすがに、時間がかかった。めでたく100に選ばれた原稿は、本の中の数ページとなって全国の書店に並ぶことになる。慎重にならざるを得ない。

1000から100に絞る作業はすでに終了している。だが、やっぱりあの原稿を入れたほうがよかったかという後悔に似た思いは消えない。結局、自分の力だけでは100のうちの半分くらいしか選ぶことはできなかった。あとは、編集者にお願いした。一つ一つの原稿に、書いた者としての思いはある。だが、選定基準は、書店に並ぶ本だという点である。一般の読者の方々に、この本を手にとって読んでもらうにはという視点である。こういった専門的なことは、素人の自分よりも出版のプロにお任せしたほうがよいと判断した。

手に取ってもらうには、書籍のタイトルが重要である。こちらは、まだ仮の段階である。これから決めていかなければならない。これが悩ましい。また、それと同じくらいに、100の原稿、一つ一つのタイトルも重要である。

今回の校正では、100のタイトルを改めて吟味し直した。私のタイトルの付け方は、例えば「学級通信」といった具合に、一言である場合が多い。これだと、一般の読者にはわかりにくいというアドバイスをいただいた。そこで、原稿をチェックしながら、タイトルも今一度、考えている。

タイトルをつけるには、改めて原稿をじっくり読むようになる。あとは、一瞬のひらめきである。したがって、調子のいいときと、そうではないときとがある。調子がいいのは、朝の時間帯である。それも静寂に包まれていなければならない。あとは、温泉に入っているときだろうか。車を運転していても、ふとタイトルが出てくることがある。

校正作業には、締め切りがある。ひらめいても、そうでなくても、100のタイトルをつけなければならない。これは、原稿作成者としての責任であろう。問題は、一番大事な書籍のタイトルである。さっぱり浮かばない。ひらめかない。困った。こちらも、そろそろ決めていかなければならない。書籍が世に出るゴールは決まっている。何とかしなければならない。あとは、自分のひらめきを信じるしかない。